

学位論文の要旨	
氏名	PURNAMAWATI
学位論文題目	北スラウェシにおける日系インドネシア人のアイデンティティと組織化 A Study on the Identity and Organizing Process of Japanese Indonesians in North Sulawesi
<p>本論は、戦前から北スラウェシに移住した日系人の特徴と彼らが抱える問題点を、残留元日本兵の団体「福祉友の会」の日系人と比較しながら明らかにするとともに、北スラウェシ日系人の組織化について論じるものである。</p> <p>インドネシアという国家は、多様な言語と文化に裏打ちされた多様なアイデンティティをもった人々を、インドネシア人という単一のアイデンティティの枠に納めようとして多大な努力と犠牲をはらってきた。そして、そのアイデンティティの多様性の陰に隠れるようにひっそりと日系インドネシア人は生きてきた。日系インドネシア人といっても、従来は元日本軍人とその家族からなる「日系インドネシア人」にのみ注意が払われてきた。彼らは、1979年に法人「福祉友の会」を設立し、その存在が知られるようになった。インドネシアの日系人の組織といえば「福祉友の会」であり、日系人についての研究も、彼らを中心とするものがほとんどである。ところが、「日系人」としてインドネシア政府からも日本政府からも公式には認知されていない日系人がいる。本稿は、その認知されていない日系人を対象とするが、その存在が現在までのところ北スラウェシに限られていることから、本稿では「北スラウェシ日系人」とした。</p> <p>北スラウェシ日系人の特徴としては、以下のような点を指摘できる。①戦前の1930年に北スラウェシに移住した日本人の祖父あるいは戦中1942年から45年の間に駐留した元日本兵を祖父にもつ。②戦後、日本人の父親の不在などの事情により日本人としてのアイデンティティを喪失してきた。③日本にいる祖父の搜索について、インドネシア政府や日本政府からの援助がない、④現在、多くの北スラウェシ日系人が茨城県大洗町に移住しており、大洗町での生活では多くの問題を抱えている。</p> <p>彼らは恒常的に日本の大洗町に移住しているにもかかわらず、日本社会との関係が希薄で、日本の生活や仕事のやり方、日本語の習得もできておらず、現在もその状況を改善できないままである。もし、彼らが日系人としての組織や共同体をもち、日系人団体として認知されるようになれば、日本政府などの支援も受けることができるし、彼らが日本人家族を探すことも容易になるだろう。また、日本への移民労働者としてのスキルアップを図ることも</p>	

できるに違いない。こうした推測が正しいとすれば、大洗町の北スラウェシ日系人がなぜ日系人として組織を作れないのかが疑問になる。本研究は、北スラウェシ日系人の組織化を困難にしている要因の分析を中心に、北スラウェシ日系人のアイデンティティと組織化について論じるものである。

先行研究としては、「福祉友の会」に所属する残留元日本兵とその家族からなる日系人に関する研究に比べると、北スラウェシ日系人を対象にしている研究は非常に少ない。

本論の研究の特徴は、先行研究が「北スラウェシ日系人」を部分的にしか対象にしていなかったのに対して、彼らの「日系人」としての起源から現在までの歴史的経緯を全体的に把握しようとして点にまずはある。そして、「北スラウェシ日系人」の抱える問題を、彼らの日系人としてのアイデンティティの問題に注目しながら、福祉友の会の日系インドネシア人や日系ブラジル人、日系フィリピン人との比較によって明らかにしている点である。

また、本論文では、日系インドネシア人に関する従来の研究や移民研究などの成果に依拠しながら、「福祉友の会」が発行した「月報」「会報」といった資料に加え、筆者が直接当事者に行った聞き取り調査の成果を活用している。聞き取り調査は、北スラウェシ日系人については2009年6月10日から20日にかけて北スラウェシのマナド、ビトゥン、トモホンで、2007年6月と2010年2月には茨城県大洗町で行った。またインドネシア政府の彼らへの支援に可能性については、2010年2月28日に東京のインドネシア大使館でインタビューを行った。

以上の聞き取り調査の成果を踏まえ、本論では以下のような構成で分析を進めた。

まず第1章では、戦前1930年以降に沖縄から北スラウェシに移民した日本人の、戦前から戦中、終戦までの移動の経緯と社会的・経済的生活状況を論じることにより、「北スラウェシ日系人」概念の形成とその歴史的背景を明らかにした。

第2章では、比較対象として元日本兵を中心にした「インドネシア日系人」とその組織「福祉友の会」をとりあげ、組織の設立の経緯、目的や運営、活動内容、成果、そして現在組織が抱える課題について論じることにより、「インドネシア日系人」のアイデンティティ形成にとって「福祉友の会」という組織が果たした意義について明らかにした。

第3章では、茨城県大洗町に移民している「北スラウェシ日系人」について、「福祉友の会」との関係にも触れないから、戦後、彼らが日系人としてのアイデンティティを喪失していった過程、歴史的背景を明らかにした。

第4章では、「日系インドネシア人」と「北スラウェシ日系人」のアイデンティティ形成の過程を比較することによって、北スラウェシ日系人が抱える問題を検討し、日本人社会との関係を未だ形成できず、生活の向上にも結びついていない現状について論じた。

第5章では、日系ブラジル人や日系フィリピン人の事例を参考し、北スラウェシ日系人の

組織形成の可能性を探り、組織化のための今後の課題を提示した。

以上の分析を通して言えることは、彼らが抱える問題の解決にとって、日系人としてのアイデンティティの形成は必要であり、彼らの多角的な属性（インドネシア人であり、マナド人であり、ピトゥン人であり、トモホン人であり、日系人）を統合し、「北スラウェシ日系人」のアイデンティティを形成するには、北スラウェシ日系人の組織化が、一番現実的であるということである。そして、その組織化の実現に当たっては、組織の必要性を彼らが自覚するために、粘り強い啓発活動と、それを継続的に遂行できる組織のリーダーとなりうる人物の養成が求められる。

平成23年1月24日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

学位（博士）論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 プルナマワティ

学位論文題目

北スラウェシにおける日系インドネシア人のアイデンティティと組織化
(A Study on the Identity and Organizing Process of Japanese Indonesians in North Sulawesi)

論文審査の概要

1. 論文の狙いと概要

プルナマワティ氏の博士学位請求論文「北スラウェシにおける日系インドネシア人のアイデンティティと組織化」は、1990年代以降移民労働者として茨城県大洗町に流入した日系インドネシア人の歴史と現状を対象とした論文である。本論文で北スラウェシ日系人と呼ばれている人々は、ジャワ島北部に位置するスラウェシ島のマナド、ピトゥン、モナドという三つの地域に居住する人々を指している。これまでの日系インドネシア人に関する研究は、ジャワ島を中心に居住し、「福祉友の会」という日系インドネシア人組織に結集した人々に関するものが大半を占め、プルナマワティ氏が取り上げた北スラウェシ日系人についての研究は移民労働研究などの分野で近年ようやく着手されたばかりである。

プルナマワティ氏は、北スラウェシ日系人が日系人としてのアイデンティティが非常に希薄である点に着目し、彼らの歴史的ルーツ、第二次世界大戦後の混乱のなかでの困難な生活などを辿ることによって、北スラウェシ日系人のアイデンティティの歴史的推移を明らかにしている。こうした歴史的分析を踏まえて、現在茨城県大洗町で移民労働者として働く北スラウェシ日系人への聞き取り調査を行い、北スラウェシ日系人が現在直面してい

る問題及びそれらの問題を克服するための組織化の必要性について論じている。

2. 論文の構成

序論において北スラウェシ日系人を研究対象とする意義及び論文の目的が述べられている。これまでの日系インドネシア人研究は、戦中に日本に駐留した日本兵とその家族にルーツを持ち、1979年に「福祉友の会」という日系インドネシア人団体を結成した人々を中心に行われてきた。これに対して、北スラウェシ日系人の場合、日本でもインドネシアでもほとんど知られておらず、近年ようやく移民労働研究などの領域で注目されているにすぎない。こうした研究の現状を指摘したうえで、北スラウェシの歴史と現状を全体的に把握し、他の日系人（福祉友の会系列の日系インドネシア人や日系ブラジル人、日系フィリピン人）との比較を通して北スラウェシ日系人の特徴を抽出し、現在その多くが移民労働者として茨城県大洗町に居住している北スラウェシ日系人が直面している問題とその克服の方策を検討するという課題を設定している。

第1章「北スラウェシ日系人」は、北スラウェシという地域の歴史と風土を概観したうえで、北スラウェシ日系人のルーツとなる沖縄漁民の流入、戦時中の日本軍の駐留のプロセス、そして戦中から戦後にかけて北スラウェシ日系人の父親が全て日本に帰還した状況を検討している。北スラウェシ日系人が日系人としてのアイデンティティを喪失する要因として日本人である父親の不在をプルナマワティ氏は指摘しているが、日本人の父親がどのような経緯でインドネシアを離れ、その当時の家族はどのような状況に置かれたのかという点について、現地での聞き取り調査の内容を紹介しながら説得的に論じている。

第2章「インドネシア日系人の二つの系譜」は、すでにこれまでの日系インドネシア人研究が取り上げてきた「福祉友の会」に参加した日系インドネシア人を分析したものである。（なお、本章は、『地域政策科学研究』に査読論文として掲載された論文に加筆修正を加えたものである）。ここでは、日系人としてのアイデンティティが希薄な北スラウェシ日系人に対して、「福祉友の会」に参加した人々がなぜ日系人のアイデンティティを獲得していったのか、歴史的な経緯が述べられている。

第3章「独立戦争後の北スラウェシ日系人」は、インドネシアの独立以後の歴史のなかで、北スラウェシ日系人がどのような生活を送ったのかについて、聞き取り調査の成果も交えて論じている。とくにスハルト政権誕生後のインドネシア人としてのアイデンティティ強化政策のもとで、「福祉友の会」のような組織を持たない北スラウェシ日系人は、自らのルーツを隠して生活せざるを得なかった状況に追い込まれていった過程が明らかにされている。こうした境遇に置かれていた北スラウェシ日系人が、日系人としてのアイデ

ンティティを回復する契機となったのが、何人かの日本人との出会いであり、本章後半では、こうした日本人との出会いの経緯が明らかにされている。

第4章「移住労働者としての北スラウェシ日系人」は、茨城県大洗町の工場経営者との出会いを契機として、また北スラウェシでの困難な生活状況から脱却するため、大洗町に北スラウェシ日系人が移住労働者として来日した経緯が論じられている。本論文によれば、大洗町の外国人労働者は近年中国人労働者が増加しつつあるが、依然としてインドネシア人労働者が占める比率も高く、インドネシア人労働者の大半が北スラウェシ日系人であるという。その北スラウェシ日系人が、大洗町での生活で直面している諸問題について、プルナマワティ氏は、日本社会との交流が少ないことや、転職の困難や教育上の問題などを指摘している。

第5章「北スラウェシ日系人の組織化の可能性」では、第4章での現状分析を踏まえて、北スラウェシ日系人が現状を改善するための解決策が検討されている。プルナマワティ氏は、日系ブラジル人や日系フィリピン人が日本社会で直面する問題を克服するために自らの組織化を行っていることを、これら日系人社会に関する先行研究に基づいて指摘している。そのうえで、なぜ北スラウェシ日系人が組織化できなかったのかという点を、彼らのアイデンティティの希薄さや地縁・血縁組織との関係などと関連づけて説明している。

結論では、本論での分析を踏まえて、インドネシアを取り巻く歴史的な環境やインドネシアの戦後史の歩みが北スラウェシ日系人のアイデンティティの問題と密接に関連しているということ、他の日系人とは異なり自らの組織をもたない北スラウェシ日系人は、茨城県大洗町での生活でも様々な困難に直面しているということ、そして、従来彼らの組織化を阻んでいた血縁・地縁関係の強さを克服することが当面の課題であるということが提示されている。

3. 本論文の評価すべき点

本論文は、これまで十分な研究が行われていなかった北スラウェシ日系人に関して、北スラウェシ日系人の歴史と現状について取り扱ったものである。従来の日系インドネシア人研究は、「福祉友の会」に参加した日系インドネシア人を中心に行われており、本研究は、日系インドネシア人のもう一つの姿を描き出したものと言える。また、これまでの研究の多くは日本人研究者によって行われてきており、インドネシア人研究者による研究は極めて部分的なものにとどまっていた。この点でも本研究は一定の意義を有しているといえる。さらに、文献資料だけではなく、ジャワ、北スラウェシ及び茨城県大洗町での精力的な聞き取り調査の成果も活用した分析になっていることも評価することができる。

4. 問題点

本論文が対象としている北スラウェシ日系人の歴史と現状についてある程度明らかにされているものの、北スラウェシ日系人の歴史的経験や現在抱えている問題が、日系インドネシア人問題やひろく日系人問題とどのように関係しているのか、必ずしも明らかではない。これは比較の対象として日系ブラジル人や日系フィリピン人の事例が取り上げられているものの、これら他の日系人に関して十分に掘り下げた分析がなされていないことに起因すると思われる。また、論文のキーワードであるアイデンティティや組織化について、北スラウェシ日系人自身がどのように受け止めているのか、彼らの生活の実態や意識構造にまで踏み込んだ分析が十分になされているとは言えない。

5. 総合評価

本論文は、前記のごとくいくつかの問題点はあるが、北スラウェシ日系人というこれまで研究の光を当てられてこなかった人々について、彼らの歴史と現状を明らかにした初めての研究であるといえる。とくに、彼らに対する聞き取り調査を精力的に行っており、文献資料では必ずしも明らかではなかった事実を掘り起こしている。また、日系人研究はこれまで主として日本人研究者によって担われてきており、プルナマワティ氏の研究は、よりグローバルな視点からの新たな日系人研究の先駆けにもなりうると考えられる。よって、審査員は全員一致で提出された論文「北スラウェシにおける日系インドネシア人のアイデンティティと組織化」を、博士（学術）の学位を与えるのに十分な学力と見識を有するものと認定した。

授与する博士学位 学術

論文審査結果 合 否

審査委員

主査 (氏名) 平井一臣

副査 (氏名) 桑原季雄

副査 (氏名) 西村知

副査 (氏名) 宮内泰亨

平成23年1月24日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

最終試験の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 プルナマワティ

学位論文題目

北スラウェシにおける日系インドネシア人のアイデンティティと組織化
(A Study on the Identity and Organizing Process of Japanese Indonesians in North Sulawesi)

最終試験の概要

プルナマワティ氏により申請された学位(博士)論文に関する最終試験は、平成23年1月24日、下記4名の審査委員により行われた。審査は、冒頭に申請者による学位申請論文の内容説明があった後、それぞれの審査委員から一定の評価を含む見解の表明と問題点の指摘がなされ、申請者はそれに応答する方式で進められた。

各審査委員からは、本学位申請論文について、論文のキーワードであるアイデンティティや組織化についての概念上の問題や、他の日系人との比較の問題、北スラウェシ日系人の現状の問題等を中心に質問がなされ、プルナマワティ氏からの説明がなされた。アイデンティティ問題については、より多面的な理解が必要なこと、比較の対象である日系フィリピン人、日系ブラジル人についてはより掘り下げた検討を行う必要があることなどが指摘された。これらの質疑のなかで示された問題点や積み残された課題があるとはいえ、本論文は、北スラウェシ日系人を本格的に取り上げた初めての研究であること、主として日本人によって行われてきた日系人研究に対してインドネシア人が取り組んだ研究として意義を有するという点、さらには、文献資料だけではなく、インドネシアと茨城県大洗町での精力的な聞き取り調査の成果を活用していることなど、北スラウェシ日系人について新たな知見を提供する実証的な論文であるという点で審査委員の意見は一致した。

以上により、プルナマワティ氏は博士（学術）の学位を与えるに十分な学力と見識を有するものと認定した。

授与する博士学位 学術

最終試験結果 合 否

試験委員

主査 (氏名) 平井一臣

副査 (氏名) 梨原季雄

副査 (氏名) 西村知

副査 (氏名) 宮内泰介